

大迫田地下タンク解体の運命

昭和 11 年に、海軍省は、渡辺伊三郎軍需局員の提案をいれて、原油 100 万キロリットルの緊急備蓄を決定し、翌年更に備蓄目標を一挙 10 倍の 1 千万キロリットルに上げた⁽¹⁾。本計画により、徳山に建設された原油備蓄槽こそ、12 基の大迫田地下油槽群であり、戦後はいささか厄介な存在として、遂に解体される運命をたどったのである。

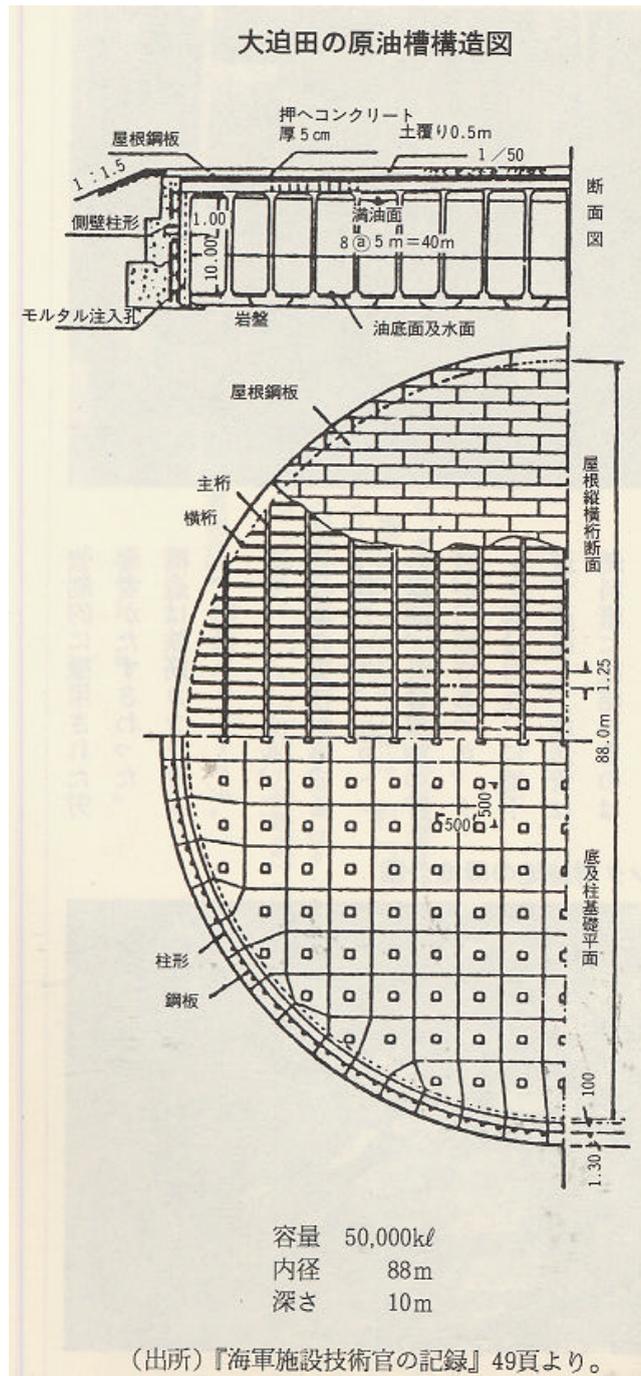
この油槽群の建設については『徳山市史⁽²⁾』に詳細に誌されているが、それによると、敷地 135,986 坪は昭和 11 年に徳山市が委託を受けて買収し、同年より呉海軍建築部が建設を開始し、昭和 17 年まで続けた。工事には朝鮮から強制的に徴用された労働者がたずさわった。構造は鉄筋コンクリート、直径 88 メートル、高さ 11 メートル、270 本の支柱から成る円型タンク、5 万トンの原油、又は重油の貯蔵が可能であった。タンク群はお互いに地下道で連絡し、油送管は燃料廠に直結するのはもちろん、下松日本石油(株)製油所とも結ばれていた⁽³⁾。

昭和 17 年末に 12 基目を完成し、以後 4 基の計画を残して工事は中止された。昭和 20 年夏の敗戦時は、もちろんタンクは空であった⁽⁴⁾。戦後政府は全国の軍用タンク底油の採集を計画し、出光興産(株)がその作業を請負ったことは、本書第 4 編の「出光興産製油所の建設」中にも示されている。

しかし底油の爆発事件がおこる。

昭和 23 年 6 月 5 日、1 少年が、好奇心から点火したマッチ棒を、8 号タンクのマンホールに投入し、タンクに充満したガスに引火爆発し、タンク蓋上の耕地で耕していた者 1 名が死亡した。

なおタンクの表層地を含む一帯の国有地には、旧燃料廠職員、復員者等が農地として借り受け開拓者組合を結成して耕作を行っていた⁽⁵⁾。しかしタンク爆発により、タンクの存在は耕作者、住民に不安感を与えるに至った。



昭和 30 年代に周南石油コンビナートが、旧燃料廠跡を中心に形成され、工場群と市街地間に、公害防止のために周南緩衝緑地が造成されることになり、昭和 43 年度から大迫田油槽群跡を含む丘陵地域に帯状に周南緑地造成工事を実施した。その際地下タンク 12 基の鉄骨等は全部撤去され、埋戻された。その廃材売却代金 1 億 7,200 万円⁽⁶⁾という金額も、巨大な地下タンクの最後に相応しい話題ではなかろうか。



(出所)『周南緑地』(徳山市発行)より。

注

(1)『日本海軍燃料史』(上) 619 頁。

(2)『徳山市史』旧版、1 頁。

(3) 下松日本石油との油送管溝は現存する。

(4) 昭和二十年四月六日の燃料廠の日誌によると、この時点における重油の残量は、1 万 5,000 トンと記録されており、日本全体の残量の 3 分の 1 という状況であった。又、地下タンクの底の方には、約 200 トンの底油が残っていた。これは、普通のポンプでは届かず、手押しポンプでしか汲み出せないものであった。

ところで、この日徳山に寄港した戦艦大和(満載搭載量 6,300 トン)はタンクに 4,000 トン、矢矧は 1,250 トン、護衛艦は 900 から 500 トンを給油した。(ラッセル・スパー(左近允尚敏訳)『戦艦大和の運命』新潮社、昭和 62 年、167 - 168 頁。)

(5) 川久保藤助氏蔵書類綴『大迫田国有地開拓者組合』。

(6)『周南緑地』(徳山市発行)。